

郷土の小川未明



この本の印税の一部は、未明関係資料の整理、収集に使われます。

郷土の小川未明

昭和四十七年十二月一日 発行

定価 七五〇円

編者 高田文化協会

上越市立高田図書館内

発行者 新保 庄三

発行所 株式会社 さ・さ・ら書房

東京都豊島区南池袋一丁目六番二
電話〇三(九八八)五〇五四
振替東京 一三三三九〇七

印刷所 株式会社 ユウダイ

東京都千代田区内神田一の四の五

製本所 株式会社 小野寺製本

装丁 木島 紀子

郷土の小川未明

高田文化協会編

さ・さ・ら書房

刊行にあたって

小川未明先生が亡くなられてから十一年になります。

生前、先生は郷里の詩碑に「夏が来るたびに少年の日を思い出す、雲に、風に、……」と記されましたが、わが上越の地は先生が生れ、幼・少年時代を過されたというばかりでなく、先生の心情を育てた心のふるさとであります。先生はこのふるさとをこよなく愛惜し、未明文学を大成されました。私たちは、未明先生の真価をさらに多くの人たちと語り合い、語り継ぎたいと念願し、昨年十一月、市立高田図書館で「小川未明展」を開催致しました。また、次女の岡上鈴江先生を迎え「未明を語る夕べ」も開きました。これが契機となり、未明に関する本を出版しようという声がかきあがってきました。

そして、約一年後の今、本書出版の運びになりました。

本書は未明文学の研究者、上笙一郎先生の助言を得て、二つの面から未明を語ることとしました。その一つは児童文学界からみた未明、他の一つは郷里の人たちからみた未明であります。児童文学界の先生方は私たちの意を汲み快く多数の原稿をお寄せ下さいました。また、地元でも未明先生に関係の深い人々や、出身校、生誕地の学校等の児童・生徒がそれぞれの立場で熱心に執筆されました。

た。御寄稿のみなさまに心から感謝しています。

この企画をすすめてゆくうちに、児童文学関係者が東京で毎年実施されていた未明忌を、今年は未明先生の生地で開催したいということになり、去る七月九日その実現をみました。会場はかつて未明先生が学ばれた中学校跡の図書館でした。当日はあいにくの風雨でしたが、東京から児童文学関係者二十余名、児童文学研究の女子大学生十数名が参集し、多数の地元参加者と共に盛大な未明忌になりました。この天候、この会場の未明忌は、先生を追想するにふさわしく、印象深いものでした。

アンデルセンとならび称せられる偉大な未明先生の文学は、次の世代の人々の心に強く生きつづけることでしょう。

本書の刊行にあたり、ご支援頂いた高田図書館並びに地元有志の方々や、さ・さ・ら書房主（郷里出身）のご好意に対し深謝いたします。

高田文化協会長 小 泉 孝

目 次

刊行にあたつて

第一章 未明とその文学……………9

未明先生の想い出……………坪田 譲治…11

小説家であり童話作家であつたこと……………小田 巖夫…14

雪国の野ばら……………与田 準一…20

——未明文学に思うことなど——

未明童話と私……………関英 雄…25

未明童話研究のための覚え書……………続橋 達雄…32

未明童話から私の得たもの……………杉 みき子…39

第二章 未明をとりまく人びと……………47

遠い日の想い出……………岡上 鈴江…49

私の心に今も生きている未明……………小川 清隆…55

あの頃の思い出 未明先生詩碑建設 松井 泉吉… 62

未明先生の思い出 堀川 歌子… 68

雪止みて 佐藤 真二… 76

未明さんのご両親の思い出 平田 ミヨ… 84

小川未明の母 梶川 謡雪… 87

第三章 未明と郷土の子供たち …………… 93

第四章 未明 伝…………… 157

小川未明 上笙 一郎… 159

編集後記

第一章 未明とその文学

未明先生の思い出

坪 田 讓 治

未明先生をワセダ南町にお訪ねしたのは、明治四十一年、私が十八歳の春でした。それから五十二年、私が七十一の同じ春五月、先生は七十九歳でなくなられてました。この半世紀にわたる永い歲月、私は先生から何を学び、何を教えられたでしょうか。人生について、生活について、文学について、先生が身をもって教えられたことは、一言にして云えば、それは清潔ということではなかったかと思ひます。先生のお部屋は、いつの時代でも、チリ一つ止めない、誠に清潔無類の感じでした。これは部屋ばかりではありません。原稿なんかにしても、直されたところは一つもありません。初めから終まで、まるで清書されたようにキレイでした。私など、原稿を持って行って、先生の前にさし出す時、その汚さに、手が縮かむ思いでした。ところが、よくしたもので、先生は、そんなこちらの気持を御存じなのでしょうか。先生が手にとって、私たち門下の作品をお読みになったことは、殆ど一度もありませんでした。

「読んで見給え。」

きまって、先生はそう云われるのでしたが、しかしこの朗読というものの、自分の作品となると、どうも気がひけて、モジモジしたものであります。それに、三十枚までなら、まだいいのですが、五十枚六十枚となると、先生に申訳なくて——と云ったところで、私は先生の前で、五十枚もの作品を読んだことはありません。大抵、五枚か十枚の短篇ばかりです。先生は、先生御自身短篇作家だったせいか、吾れ吾れの作品も短篇を好まれました。つまり、簡單明瞭がお好きなのです。これらのことも、何か、清潔と通じるところがあるように思われます。

先生からおたよりを戴いたことも、永い月日の間ですから、沢山あったように思われます。然し先生のおたよりは、大抵ハガキであって、封書のことはい度も記憶にありません。とにかく、先生は性急でしたから、こちらからたよりをさし上げますと、もう直ぐ御返しがありました。それがきまってハガキでした。御返事のないことは——と云いますより先生の御返事を待ったような記憶は一度もありません。先生はものごとに対し速戦即決のたしでしたから、郵便を受けられると、直ぐその場で返事を書かれ、捨てて構わない印刷のハガキなどは、やはり直ぐクズ籠に入られました。毎日を割り切ってお過しだった様子に見えましたのも、やはり氣持にオリを残さない、清く澄んだ心境を好まれたからと思われます。

未明先生は吾國の偉大なる童話作家です。近く接したものが、先生から受けた感じを忘れないうちに書いておかねければと思ひ、文学とは遠い感じ乍ら、右まで申上げました。

追記

大切なことを書き落しました。先生はナゼそんなに部屋や身边を整理されて、チリ一つないように、心を使われたかということです。それはつまりモノゴトは即座に解決して、心にオリをためな
いと云うことかと思えます。ナゼでしょう。先生が云われたことがありました。創作の前に、身边
を整理し、心境を整え、作品一途に思うけれども、それがなかなか。今頃になって、先生のこ
の言葉を思出して見るのですが、つまり、これは創作に際して、心の鏡を一点クモリのないように
拭き清めると云うことではないかと思えます。そのような心境に初めて、あの「赤いロウソクと人
魚」や、「港についたクロンボ」などの作品が浮びあがり、映し出されたのです。そういう点から
考えれば、先生の文学は学んで達せられたものではなく、生れつきのものであります。従ってこれ
は真似も出来ず、学ぶことも出来ない天才の仕事であります。以上。

小説家であり童話作家であつたこと

小田 嶽夫

去年のはじめ私はある雑誌に小川未明のことを書かされたが、その中の一節に私は次のように記した。

未明は小説を書きはじめて初期から、小説と平行的にときどき童話を書いていた。未明の小説は以上に記したようにロマンチズムでありながら、暗く、いんきな、うそ寒さを感じさせるようなものが多かった。が、未明はあこがれ心を豊富に持っていたし、又神秘趣味もあつたので、そういうものも生かし、かたがた時には小説のほうの息づまるような苦しい世界から逃れたく、それが童話への仕事となつたものと思われる。例えば「港に着いた黒んぼ」という名作があるが、それは次のような文章にはじまる。

「やっと、十ばかりになったと思われるほどの、男の子が笛を吹いています。その笛は、ちょうど秋風が、枯れた木の葉を鳴らすように、あわれななき声をたてるかと思うと、春のうららか

な日に、みどり色の美しい、森の中で鳴く小鳥の声のように、かわいらしい音をたてていました」小説と童話との性質の違いはあるにしても、これは前記の小説作品とはうらはらに、何という甘美な世界であろう。

この稿で私が書くこうとすることも、じつは以上の主旨を一步も出ようとしないのである。ただ以上の拙文が簡単過ぎ、舌足らずなので、少しばかり補足しようという迄である。

ところで、右の拙文からの引用文のなかに「未明の小説は以上に記したように」とあるが、その記載の箇所を順序上ここに再録しなければならない。

未明には例えば「死」という作品があるが、それは次のような文章に始まる。

「ただ黒いものが倒れてゐる、これが人間の死であつた。真白な雪の上に、その体は凍え固まつて、頭から被^{なま}つてゐた黒い合羽から、半分顔を出してゐる。蒼白い血の氣の失^うせた顔は、はてしもない冬の空を見つめてゐるやうに仰向いてゐた。眼は、僅かに開いてゐたけれど、灰色であつて、北の雲切れのした冴えた空の色を映さなかつた」

死んでゐるのは老婆であり、右の一節につづいて、村里に一人で住む、昔御殿女中だったという不気味な感じの彼女のことが述べられるのだが、そんなふうに冒頭から何か陰惨な氣分を漂わ